

東書 五年

古文を声に出して読もう

○ 目標

・ 古典学習への入門としての教材である。これまでも、「日本語のしらべ」や「百人一首を声に出して読んでみよう」など詩歌を通して文語に親しんできた。今回は、昔話・御伽話、軍記物語、紀行文と三種の古典に触れ、言葉の響きを楽しみながらその魅力を知り、古文暗唱に導きたい。

第一次（概観）と第二次指導を混合（一時間）

〈区画〉四区画（竹取・古文・平家・ほそ道）

一よむ（音読 七名 古文と他の文に分け）

二とく（読後感の話し合い）

○ 題目

① 三つの「古文」が載っているが、昔話・お伽噺として、皆さんも知っているのは何か。

（かぐやひめ ↑ 竹取物語 板書）

② 作者の分かっているのは何か。

（おくのほそ道 松尾芭蕉 板書）

③ 松尾芭蕉は、どういう人物か。

（俳句中興の祖 吟行 紀行文）

④ 今でもテレビや映画で取り上げられるような話が、平家物語だ。これは、どんな話かな。

（実際にあった戦い 軍記物語 板書）

○ ひびき

⑤ 声に出して読んでみよう、呼びかけているが、どうしてか。

（長い間親しまれてきた 言葉の響き）

⑥ 竹取物語は、昔話の形を作ったといわれているし、平家物語は、琵琶法師によって語られたりして多くの人々に愛されてきた。面白い物語どうかは、最初の一ページを読むと分かるといわれる。この三つの古文の最初を読んでその面白さを考えようということ。

○ 手引き

⑦ それぞれ、およそ何年前のものか。

（二〇〇〇年 八〇〇年 三〇〇年）

・ 今日、一番新しい話の「おくのほそ道」を全文書いてその面白さを味わう。振り仮名は書かなくてよいが、仮名遣いに気をつけて。

三よむ（指示に沿って黙読）

四かく（視写）

月日は百代の過客にして、

行き交ふ年もまた旅人なり。

舟の上に生涯をうかべ、

馬の口とらへて老いを

迎ふる者は、日々旅にして、

旅を栖とす。

五よむ（古文と訳文それぞれ 一名ずつ）

六とく（板書をもとにしての話し合い）

○ 語義・区分

① 難しい言葉はないか。

百代の過客（行き交ふ旅人）

生涯（老いを迎ふる）

日々旅にして（旅を栖とす）（旅人）

② 二区分（前：時||旅人 後：人||旅を栖とす）

◎ 心

③ 「おくのほそ道」は、俳句を作りながら五か月かけて回った旅を元にして書かれている。この時代は、旅に出るときには、水杯を交わした（もう会えないと覚悟）大変な時代であった。そんな気持ちだが、この書き出しには感じられる。どの部分にその気持ちが強く出ているか。

（旅を栖とす||俳句を作る旅に出る）

④ そこを強調するように、書き方に工夫がある。それは、どんなところだと思えるか。

（言葉の対比 月日：年 過客：旅人

舟の上：馬の口）

⑤ 繰り返しの効果もある。

（時の流れ||旅人 人の一生も旅人）

⑥ 芭蕉の生き方が出ていて魅かれるのである。

○ 余韻（格調が高い感じだなあ。覚えよう）

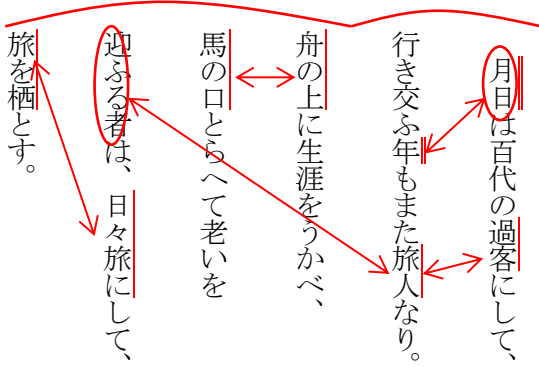
七よむ（全員で板書を指音読）

* 漢字を残して暗唱 行頭の字のみ残して暗唱

〔板書事項〕

古文を声に出して読んでみよう

300	800	1000	
4	3	2	1
おくのほそ道	平家物語	親しまれ	竹取物語
松尾芭蕉	軍記物語	ひびき	かぐやひめ
			おとぎ話
			紀行文



第二次指導は二とく、六とくのみ

第二次指導第一時

二とく

○おさらい

・おくのほそ道 最後に残した字 漢字 指音読

◎承接

・竹取物語 竹取とは かぐやとは 顛末は

○手引き

・古文の部分全文視写 (昨日と同じように)

今は昔、竹取のおきなと

いふ者ありけり。野山に

まじりて竹を取りつつ、

よろづのことに使ひけり。

名をば、さぬきのみやつこ

となむいひける。

その竹の中に、もと光る

竹なむ一筋ありける。

あやしがりて、寄りて見るに、

つつの中光りたり。それを

見れば、三寸ばかりなる人、

いとうつくしうてあたり。

六とく

○語義・区分

・今は昔 おきな まじりて よろづ あやし

いと うつくしう (今と意味が違う言葉)

・二区分(前)：竹取：者 後：三寸：人

◎心

・不思議な話が始まると、予感させるのは。

(今は昔の役割りと登場人物の紹介の仕方)

○余韻

・お伽噺は、大人も楽しんだんのね。

* 最後は暗唱に挑戦したい。

第二次指導第二時

二とく

○おさらい

・登場人物の紹介の工夫を確認 (板書)

◎承接

・平家物語 平家の盛衰の話 (補説)

○手引き

・古文全文視写 (難しい漢字も挑戦)

祇園精舎のかねの声、

諸行無常のひびきあり。

娑羅双樹の花の色、

盛者必衰の

ことわりをあらはす。

おごれる人も久しからず、

ただ春の夜の夢のごとし。

たけき者も

つひにはほろびぬ。

ひとへに

風の前のちりに同じ。

六とく

○語義・区分

・四字熟語 (補説) かねの声 ことわり

おごれる人 (たけき者) ひとへに

・二区分 (前)：漢文調 後：和語

◎心

・仏教の教えと現実の世の中の様子を重ねる。平家の盛衰の物語を暗示する書き出し。琵琶の歌詞としての姿 (七五調など)

○余韻

・子供用に書かれた平家物語も読んでみたい。

* 最後に暗唱に挑戦したい。